旅河君ちのティアマトさん

ガンダムラザーニャ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ティアマトは消滅し虚数空間に沈んだ。沈んでいく中、ティアマトは思う、人間を少しでも愛したいと。そんな時に、かつて自分を送り込んだ男が現れ力を封印し、人間に触れて考えたみてはと言われ人間の世界に送られる。人間の世界でティアマトは何を見て、何を思うのか。

目次

出会い ―― 1
会話 ―― 8
不安 ―― 12

出会い

ティアマトｓｉｄｅ

人類悪、またはビーストⅡと呼ばれたティアマトである私はは敗北した。

冥界に落とされ、翼や角を切り落とされて英霊たちと同格に下げられたうえで負けた。

そして、消滅し再び虚数空間に沈みいくらか時間が経ったとき私は思った。

私は、もう母親になれないの？

私はただ子を育み愛したかった。

でも、人間が怖い、だから殺さないといけなかったのに。

だって、殺さないと私が殺されるから。

でも、今思えば人間たちも私の体を母体として世界と共に生まれた。

ならば、私を殺したとしても自分の子であることに変わりはないのではないか？

でも、自分は愛さないでと願ってしまった。

そんな自分に子を愛する資格はあるのか？

「ほう、まさかお前がそう思うとはな、ティアマトよ」

「？」

ふと、男の声が聞こえたので振り返る。

そこにいたのは私を送り込んだソロモン王、いやゲーティアだった。

もはやソロモン王としての姿はなく、右腕は失い右半分が黒ずんでいた。

「Ａａａ？」

私はその姿はどうしたのかと聞く、しかし私はこの言葉しか話せない。

それでも、意思表示のためにそれしかなかった。

しかし、ゲーティアは言葉が分かったのかほくそ笑むような、それ

でいて自嘲するような笑みを浮かべて口を開く。
「フ、私も負けてしまったのだ。
しかし、悪くない結末だったよ」
「Ａａ?」
「どうやら、人間は悪いものもいれば良いものもいるようだ。
それでいて、いつか命尽きる身でもあっても懸命に生きて歴史を作ってきた。
私は最初は悲しい物ばかりだと思い絶望したが、結局それは一側面に過ぎなかった」
ゲーティアはまるで昔を懐かしむように私に言った。
すると、ゲーティアの体が足の先から光の粒子になるように消滅し始めた。
「Ａａａ!?」
私はゲーティアの言ったことと、消滅し始めていることに驚いた。
しかし、ゲーティアはそんなことを気にしない様子で私に残った左手を翳した。
「私はここまでのようだ、ソロモン王とカルデアのマスターのおかげでもう存在が消滅してしまうのだから。
だが、お前はそういうわけではないだろう?」
「Ａａａ?」
「お前は人間を愛したいと少しは思ったのだろう?
なら、せめて私の最後の力を振り絞ってお前をある程度人間に近づけた状態で、人間の世界に送ろう。
まあ、ある種の力の封印だな。
そして、お前の眼で今の人間は本当に愛すべき存在なのかを見極めてこい」
ゲーティアは左手を輝かせてその光を私に浴びせる。
力が抜けていくのを感じた、神でもあるはずの私が人間に近づくのを感じた。
「Ａａａａ、あああああ・・・?
えっ、何で、私が人間の言葉を?」

「お前を人間に近い存在にしたのだから当然だ。
だが、それはお前からすればいくらでも振り切れる程度だ。」
「それは何で？
また人間に殺されるために？」
「それは違うな。
言ったはずだ、見極めるためだとな」
「そう・・・」
「お前も人間に触れて、もう少し考えてみるべきではないか？
そしてお前にとって害悪な物だと思えば私の力を振りほどいて滅ぼせばいい。
さてそろそろ時間のようだ、勝手口はお前の後ろだ」
ゲーティアは私の後ろを光に包まれ消滅しかけている左腕で指を指す。
すると後ろから光が漏れ出し、私を包み込み意識が薄れていく。
その中でゲーティアは言った。
「人間は非力だ、だがそんな人間に私は負けたのだ。
だから、お前もそんな人間に触れて考えるが良い、さらばだ」
それを最後に、私は意識を失った。

主人公ｓｉｄｅ
ある街に、ザーザーと雨が降りしきる。
「はっ、はっ！」
雨が降っている中、僕は傘を忘れていたのでカバンを傘代わりにして走っていた。
そうして、一軒家である自宅の玄関の屋根に辿りついた。
「うぅ、びしょ濡れだよ・・・」
まさか雨が降るとは思いもしなかった。
それもそうだ、今日の天地予報では快晴だって聞いていたんだから。

はあ、明日も学校あるのにズボンもびしょ濡れ。
カッターシャツはともかく、ズボンは替えがあまりないし乾かすのに時間がかかる。
そんなことを思いながら空を睨みつける。
でも、そんなことしてもどうせ雨はすぐ止むわけがない。
僕は諦めて、玄関のドアに手を伸ばそうとした。
その時に玄関の左方からドサッと何かが落ちる音が聞こえた。
何の音だろうと気になり、左方にある自宅の庭に目を向ける。
「え？」
僕はそれを見て驚いた。
庭に人が倒れていたのだ、それも少女だった。
水色の髪が足元に届きそうなほどの長さで、服装があまりにも露出度が高く大半が白い肌をさらしていた。
その中でも驚いたものはそれらのものじゃなかった。
少女の頭から伸びている羊を思わせるような、それでもかなり長く大きい角。
そして、何やら特殊な物で手足が縛られているように見えたことだ。
「何でこんなところに人が？
人、なのかな？
とにかく、中に入れないと！」
雨の中、倒れている少女に風邪を引かせるわけにはいかなかったので、家の中に運び込むことにした。

家に入れた後すぐに少女の体に雨の水分が残らないようにタオルで拭いた。
少女の体に触れて予想通りというか、やはり体が冷えていた。
なので、体を温めようとリビングのソファに運び、毛布を掛けたり暖房をつけた。
「ふう、今のところはこれでいいかな？

とりあえず、温かい物作っておかないと・・・」
僕はすぐにキッチンに向かい即席のスープを作った。
そして、スープを持って少女のいるリビングに向かった。

ティアマトｓｉｄｅ
光を感じ、私は目を覚ます。
久しぶりでいて、さっきぶりと思える目覚めだった。
「・・・？」
体を何かが覆っている？
でもどこか柔らかくて、暖かいものだ。
触ろうとしたが、今の私は人間に近い存在になっているとはいえ、ファム・ファタール、いわば本来の姿の頭脳体になっていた。
つまりは手足が縛ってある状態なので思うように動かせない、しかし腰を動かすことができたので上体を起こし周りを見回す。
「・・・・」
壁が白く、床は木のようだがツルツルとしているみたいに光沢があった。
壁にはメソポタミアにはなかった見たこともない道具があり、天井は一つの灯が部屋に光を照らしていた。
そして、これは椅子であろうか、寝床にしては少し狭い感じがしたがフカフカしてる感触があり悪い気がしなかった。
すると、目の前の木でできた扉が開き、人間が入ってきた。
「あ、気がついたんだね」
人間は微笑みながら手に盆を持って近づく。
その人間は黄緑で背中に届くほどまである髪を一束に結っていて、それでいて男とも女ともとれる中性的な体格だった。
最初はキングゥかと思ったがマルッキリの別人だと思う、彼はこんなにも子犬みたいな雰囲気なはずがないからだ。
しかし、人間ってだけで心の奥底から恐怖が混み上がり体が震え上がる。

「あの、大丈夫？」
人間は心配そうに私を見つめる。
やめて、近づかないで、怖い。
その感情が頭のなかで雪崩れ込みつい叫んでしまう。
「来ないでッ!!」
「っ!?」
人間はビクッと固まり、どこか悲しい表情になっていた。
私はそんなことを気にせず手足の拘束を外し体を覆っていた布を持って部屋の隅に蹲る。
情けない話だ、人間を愛したいと思ったのにいざ人間を前にするとこれだ。
まだ人間に倒されたことが記憶から呼び覚まされてしまう。
でも、人間は私に近づいてきた。

主人公ｓｉｄｅ
最初は何を言われたのかと驚いた。
来ないでと、目の前の少女に言われて悲しかった。
でも僕はそれ以上に悲しいと思った、少女の表情が泣いている子供のように見えたからだ。
そんなことを放っておけなかった。
だからすぐに動いて部屋の隅に蹲る少女の前にスープを置いた。
「な、何のつもり？」
少女は今の行為がわからなかったのか、信じられない様子で問いかける。
僕は警戒心を抱かないように、微笑みながら答える。
「毛布を被っているけど、その格好だと風邪を引くと思うし、良かったらこれを飲んで暖かくして欲しいなって思っただけだよ」
「・・・？
～～～～っ!!
み、見ないで！」
少女は自分の格好を見て恥ずかしかったのか顔を真っ赤にしてよ

り強く毛布を体に巻いて、スープのカップを取って僕に顔が見えないようにしながら飲む。

会話

主人公ｓｉｄｅ

「落ち着いたかな？」

「・・・」

少女がスープを飲み終えて、しばらく僕をにらみつけている少女に声を掛けた。

でも、少女は一向に口を開かずただにらみつけていた。

まるで、目の敵を見つめるような、それでいて怯えているような目だった。

「君はどうして、僕の家の庭で倒れてたの？」

「は？」

「覚えてないの？

君はこの雨の中、庭に倒れこんでたんだよ？」

「そんなの、私が知るわけないでしょ！」

僕が少女が庭に倒れていたことを聞くと、少女が眉をピクッとひそめ突き返すように言った。

どうやら、自分でもわからない様子だった

「そうなんだ・・・。

じゃあ、君は誰なの？」

庭にいたことはこれ以上聞いても意味がないと思い、僕は名前を聞くことにする。

「・・・」

少女はしばらく黙りこんでいたが、小さい声で、口を開いた。

「・・・ティアマトよ」

「ティアマト？」

ティアマトｓｉｄｅ

「君は誰なの？」

目の前にいる人間がそのように聞いてきたので、私はどう答えれば良いか悩んでしまった。

なぜなら、もしそのまま本名を言ったら殺されるかもしれないから、目の前にいるこの人間がこの家から追い出されるかもしれないからだ。
しかし、かといって人間相手に嘘の名前を言うのは癪に触るので本名を言うことにした。
「ティアマト？」
「そうよ、メソポタミアにおける神様みたいなものよ」
この人間、まるで聞き覚えのないような言い方で聞き返してきた。
本当に私のことを知らないのかと思った。
「ティアマト、良い名前だね」
「は？
あなた、バカじゃないの!?」
目の前にいる人間はほほ笑みながら私の名前のことを良い名前と言い出したのだ。
仮に知らないにしても、こんな人類悪の存在の名前を良い名前というのはどういう神経しているのか。
「いや、良い名前だなぁって思っただけだよ。
そうだ、僕は旅河（たびかわ）大翔（はるま）って言うんだ、よろしくねティアマトさん」
「別にあなたの名前なんて聞いてないんだけど？
まったく、なんでこんな人間に拾われて気を使われないといけないのよ・・・」
「別に気を使っているわけじゃないよ、普通に接しているだけだよ？
それで、君はこれからどうするの？」
「っ！
そ、それは・・・」
これから、どうするのか。
そんなこと今まで考えたことがなかった。
確かに私はついさっきこの世界に来たばかりだ、寝床をどこにするかなんて決めてない。
どうしよう、このまま目の前の人間を殺してこの家を奪い取るか、それとも今すぐこの家から出て適当な場所を探して寝床にするか。

でも、今の私の力は人間よりも強いとはいえ人間を殺せない。
そんなことしてしまえば、この世界に来る前の自分の気持ちに嘘をつくことになってしまう。
だったら、ここは大人しく出ていって・・・。
「ねえ、良かったらこの家で一緒に住まないかな？」
人間が、大翔が私に微笑みながらそんな提案をする。
この家に住む？
人間風情が、私と一緒にこの家で住む？
何だ、この怒りにも喜びにも似たような、それでいて身体中が暑くなるようなこの感情は？
「一緒に住む？
あ、あなたと私がこの家で？」
「そうだよ、そもそもここは僕の家でもあるからね」
「は、はぁ!?
あなたバカじゃないの、何で私が人間なんかと一緒に住まないと行けないのよ！」
大翔の言葉に驚きを隠せず、私は声を荒げる。
人間が怖い、そんなこと言いながらきっと私を殺すかもしれないから。
人間は？つきだ、隙を狙って私を殺す気なんだ。
私の頭の中でそのようなことが巡り巡った。
でも、大翔はそんな事気にせずに私に言い聞かせるように口を開いた。
そんなことはしない、ともに居たいとでも言いたげな目だった。
「でも、行くところはないんでしょ？
それに今親も海外に出張してて僕一人だけなんだ。
まぁ、この家にもお金が入るようにしてくれてるし、正直言って僕だけじゃ使いきれないからさ、どうかな？」
大翔が私に手を差し伸べる、ついさっき会ったばかりで知らないとはいえ人類悪である私に。
まるで、それを知ったとしても一緒に居ようとほほ笑みかけるよう

にも思えるような姿勢だった。
「な、何よそれ・・・。
人間のくせして、どうしてよ・・・」
気が付いたら私の声が震えていた、涙が溢れそうだった。
「でも、そういってる割には手が僕の手の方に伸びてるよ?」
「あ・・・」
私はそんな大翔の姿勢に感化されたわけでも、絆されたのでもないのに、自然と手が伸びていた。
そして、大翔は私の手を取り、優しく微笑みかけた。
「人間は一人では生きていけない、だからこうやって手と手を繋いで互いを知りながら懸命に生きるんだ。
だからね、一緒に居よう、ティアマトさん・・・。
そして、これからもティアマトさんのこと、教えてよ」
「うん・・・」
私は優しく微笑みかける大翔に見られないように顔を俯いて静かに涙を流した。
おそらく私は嬉しかったのだろう、かつて敵として私を殺した人間に暖かく手を差しのべられたことが嬉しかったのだ。

不安

大翔ｓｉｄｅ

羊のように曲がっていて大きな角を持った少女ティアマトさんと一緒に暮らすことになった。

そのティアマトさんは、今手をつないで俯いたまま何も話さない。

ふと、僕は思った。

見た目で思ったけど、ティアマトさんってこの世界のこと知ってるのかな？

角を、瞳を、服装を見ても明らかに普通じゃない、コスプレとは違うまぎれもない本物だ。

だから思う、電話のこととかテレビのことなどこの世界のことがわかるのかなって。

「ねえティアマトさん、少し聞きたいけど良いかな？」

「ふぇ？」

ティアマトさんは驚いて顔を上げ、ふぇっと可愛らしい声を出す。

「ティアマトさんって電話とかテレビの使い方とかってわかるかな？」

「え、でんわ？

てれび？

何よそれ、私そんなの知らないわよ？」

「・・・」

ティアマトさんがキョトンとした表情で知らないというので思わず僕は頭を押さえてしまう。

なるほど、そこから教えることになるのね。

これはちょっと、僕も難しいかな？

「ちょっと大翔、どうしたの？

大翔ってば!!」

「えっ!?

あーごめんね、少し考えごとしててね」

「そう・・・、それで何考えてたのよ？

やっぱり私がこの家にいることが不満なの・・・？」
「そういう訳じゃないよ。
ただ、まずどこから教えようかって考えてたんだ。
だからティアマトさん、そんなことは気にしなくて良いんだよ？」
僕は不安に抱いているティアマトさんの頭を撫でる。
とりあえず、家での機械の使い方とか覚えてもらえるように教えようかな。
いや、明日学校あるからそのときのことにしようかな。
「よし、まずは家で留守番するときのことを教えようかな」
「留守番？
大翔はどこか出かけるの？」
「うん、僕は学生だから学校に行かなくちゃ行けないんだ。
それで、この家にはティアマトさんだけになるからどうするのかってことを教えようと思うんだ」
「そう・・・」
「でも大丈夫だよ、僕はちゃんと帰ってくるから、ね？」
「・・・わかったわ」
「うん、それじゃあ留守番でのことだけど・・・」
こうして、僕はティアマトさんに留守番でのこと（主に電話の使い方やチャイムが鳴った時の応対など）を教えた。
彼女は驚いたことに一度でやり方を覚えたのだが、先ほど言っていたメソポタミア文明の神様に関係があるのだろうか？
というより、彼女は実際やり方を覚えて練習でやらせてみて（例えば、僕の携帯に電話を掛けるなど）成功したら自信満々などや顔をかましていたけど可愛かった。
そして、ティアマトさんに留守番のやり方を教えていたら夜になったので夕食を食べて寝ることにした。

ティアマトｓｉｄｅ
大翔に留守番とやらの方法を教えてもらった。

それにしても驚きだった、今の人間は『電話』という機械を使って遠くにいる人間と話すのだから。
でも、私も人類悪とはいえ神様でもあったんだからこんな機械、すぐに使いこなして見せたわ。
さて、夕食も食べ終わったことだし次は何を教わろうかと考えているときに、大翔が話し掛けてきた。
「ねえティアマトさん、今日はもう遅いしそろそろねよ？」
「それもそうね。
それで、私はどこに眠ればいいの？
何なら外で寝てもいいわよ？」
「そんなことしたら風邪ひいちゃうよ。
ちゃんとベットで寝るんだよ。」
「・・・じゃあ私はあのソファで寝るわ。
なんだかんだ言っても座り心地もよかったしね。
あ、毛布も借りるわよ？」
「うん、わかったよ。
それじゃあ、僕は二階の奥にある自分の部屋で寝るね？
何かあったら言うんだよ？」
「ええ、わかったわ。
おやすみなさい、大翔」
「ティアマトさんも、お休みなさい」
大翔はそう言ってリビングを出て階段を昇って行った。
確か、大翔の部屋って二階の奥の部屋だったかしら？
そう思いながら私は毛布をかぶり、ソファに横にあるのであった。
「・・・そういえば、大翔明日学校に行くって言ってなかったかしら？
そうなれば大翔が帰ってくるまで私は一人ってことよね・・・」
「・・・」
私は明日のことで思考を巡らせる。
そして、なぜか大翔のことが頭によぎって離れない。
『一緒に居よう、ティアマトさん・・・』
大翔の言葉が、あの時の笑顔が、優しい声が、頭から離れない。

それと一緒に、明日のことを考えると不安になり胸の中のモヤモヤとした感じが生まれる。
「はあ、はあ・・・」
もし明日学校に行ってそれっきり帰ってこなかったら？
もしその後に死んだと知らされたら？
そんなことが頭によぎって離れない。
「はあ、はあ、はあ・・・っ！」
考えただけで胸が苦しい。
いやだ、失いたくない！
一緒に居ようって言ってくれた人間がいなくなるなんて嫌だ！
もうあの優しい声が聴けなくなるのも、いなくなるのも嫌だ！
「嫌ぁ!!」
私は勢いよくソファから立ち上がり、毛布をかぶったまま二階の大翔の部屋へと上がった。

大翔ｓｉｄｅ
「ティアマトさん、一階で寝るって言ってたけど大丈夫かな？」
僕はティアマトさんのことを考えながら部屋で明日の授業の時間割をしていた。
その時に、僕はふとあること思い出した。
「・・そういえば、確か小林さんのところにもティアマトさんほどじゃないけど、角が生えてる女の人がいたな・・・」
小林さん、近所のマンションに住んでいるＯＬだ。
両親とも知り合いで、何か困りごとがあったらこの人に頼るようにと言われてたっけ？
そして、小林さんの家にトールさんっていう角が生えているメイドさんがいたはずである。
「・・・トールさんってティアマトさんの知り合いかな？
今度会って聞いてみようかな」
僕はそんなことを思いながらカバンに教科書とノートを入れて、電

気を豆電にしてベットに横になり毛布をかぶる。
そして、寝ようとして眼を閉じようとしたときにドアの向こう、それも廊下や階段からバタバタと足音が聞こえた。
「・・・？」
僕は気になりドアの方に目を向けると勢いよく開かれる。
そこに居たのはティアマトさんだった。
毛布を体にかぶったまま悲しそうな表情で僕を睨みつけている。
「どうしたの、ティアマトさん？」
「・・・！
べ、別に何でもないわよ！」
「でも、そんな顔しているんだから・・・」
「何でないって言ってるでしょっ!!
私も一緒に寝てやるんだから！」
「えっ？」
ティアマトさんが顔を真っ赤にして叫んでいる。
一緒に寝てやるって言われて僕は呆然としてしまう。
するとティアマトさんが強引にベットに入ってきた。
「ほら、私も寝るんだからもっと奥に行きなさいよ！」
「え、あの、ティアマトさん？
これはその・・・」
「うるさいわね、良いじゃない！
明日学校ってとこに行って帰ってこなくなるなんて許さないんだから！」
「え？」
「うるさいうるさい！
明日ちゃんと帰ってきなさいよ、あなたが言ったじゃない！
一緒に居ようって！」
「・・・」
「でも、怖いわよ！
学校ってところがどんなところかなんてわからないし、帰ってくるって言っても不安なの！」

「・・・」
ティアマトさん、そこまで不安だったんだね。
僕はティアマトさんのことはよく知らない。
メソポタミアの神様って言ってたけど、授業でもあまり聞かないし、ティアマトさんとは今日あったばかりでよくわからない。
でも、寂しいんだなって思う。
だから、僕は・・・
「ふぇ?」
ティアマトさんの頭を右手で優しく撫でた。
「大丈夫だよティアマトさん。
僕はいなくならないし、学校に行って帰ってくるのは本当なんだから、ね?」
「ほ、本当よね?
嘘って言ったら殺すわよ!?」
「うん、本当だよ?
だからね、約束するよ」
僕は左手の小指を出す。
「何よそれ?」
「指切りげんまんって言って約束をするためのおまじないだよ。
さあ、ティアマトさんも小指を出して?」
「う、うん・・・」
ティアマトさんは戸惑いながらも小指を出し、互いの小指を絡ませる。
「ゆーびきーりげーんまん、うっそついたーらはりせーんぼんのーます、ゆーびきった」
そう言って僕は小指を離した。
「これで、ちゃんと帰ってくるのよね?」
「うん、約束するよ」
「そう、じゃあおやすみなさい」
「うん、おやすみなさい。
それとティアマトさん、少し聞きたいけど良いかな?」

「・・・何よ？」
「その、角が当たってるし場所取ってるから何とかならないかな？」
「・・・わかったわよ」
次の瞬間、ティアマトさんの角が光り出し粒子となって消えた。
「これで良いでしょう？
じゃあ、もう寝るわね」
「おやすみなさい、ティアマトさん」
そうして、僕たちは眠りについた。